

夏ゆけり りあすの沖に帆を揚げて

双胴船、マイグレータに見送られ、おそらく畑中会長の遺影に見送られながら参加5艇は洞掛け沖をスタートしました。本部艇は「祐幸」。カミから順に、オリジナルに加えて秋田から前日泊まり込みのクルーを乗せた白いハルが美しい「ヒポクラテス」。そのすぐシモ、わずかにリードで最高のスタートを切ったのは、進水間もない未知数艇「ムーンライトエクスプレス」。渾身のフルクルーと若い女性を乗せた「嵯峨」。昨年の仙台ベイ第2戦で並みいる大型艇を押さえて3着ゴールの石巻の実力派「ドナルド」。そして一番外側から今年の青函カップ総合準優勝の栄光の「エスポアール」は、飲むか飲まないかで議論が分かれて少しだけ出遅れたようですが、すぐにトップスピードに乗って走り出します。嵯峨がすぐにタックして沖狙い。いつまでも見ていたいのですが、今年の本部艇は、スケジュールがきついので引き返します。

半島へ

田代島、網地島、牡鹿半島突端黒崎から金華水道にかけては、本レースコースの中で最も変化にとんだ場所、そしてよく微風に捕まって全艇団子になるので有名な難所でもあります。レースのハイライトを牡鹿半島黒崎展望台から映像におさめようと言う企画のために、本部は車で移動を開始。写真家の植村さんに先に行ってもらい、今回コミッティーに応募してくれたサヴァの関口さんと私は、荷物を取って、半島へと向かいます。

たかが帆掛け船、自動車との速さは比べ物にもなるまいと思い、運営費の節約のために高速道路は使わずに行ったのですが、コバルトラインを下り、まだ先端につかないうちに12時半頃

「あっ、いたっ。」

既に先行艇は半島を回り、金華水道を半ば通過し終えようとしていたのです。そこら辺に降りてハンディカムで必死の80倍望遠で映像におさめますが、さすがに遠い。潮を食いながら滝登りのように奮闘する参加艇の姿はモザイク画像としてしか残せませんでした。植村さんによりますと、はじめに黒崎を回ったのはヒポクラテスだったようです。私が見たのはムーンライトエクスプレスとエスポアールが繰り広げる鹿渡りのバトルと、これを追う嵯峨、これを機帆

走で追う観覧艇「悠愛丸」の姿でした。

江ノ島付近

コバルトラインを急いで戻り、女川南の展望台で待ち受けますと、なかなか現れず、嵯峨からの定時連絡で、無風で各艇動かず、やっと吹き始めてきたとのことでした。やがて半島の陰からセイルが見え隠れしてきました。平島と本土の間をトップでムーンライトエクスプレス、平島と江ノ島の間をエスポアールが追いかけて、ヒポクラテスと嵯峨が争っているように見えました。その後ドナルド。とぎれとぎれではありましたが、5艇確認できました。ということは、レーティングの関係からドナルドに勝ち目があるということです。いやしかし、ちょっと待って下さいよ。たった31フィートの船（長いので月下急行と略します。）が40フィートを超える船を押しえてファーストホームもあり得るぞ。東大の流体力学の教授が水槽実験を繰り返して、この図面を横山一郎が形にしたと言う究極理詰め日本の技術の粋をこらした船らしいですが、ここまで走るものでしょうか。舌を巻きながらビデオに収めて一路ゴール地点に向かうことにしました。

岩井崎

潮吹き岩で有名な岩井崎の灯台に最も近い民宿「吹き上げ荘」には、毎年宿泊のための施設でない一階玄関すぐ脇の部屋を予約する変なオジさんたちとしてMORCは認識されておりました。いつ予約してもそりゃ空いてる訳ですよ。本来泊まる部屋として計算されてないもの。そのオジさんたちが、飲んでくだ巻いてると思ったら夜中に突然ドタバタと飛び出して行って国定公園内で花火を打ち上げてるんだから「なにあれ。」と思われるのは当然かもしれません。

今年はこれを最初にやったのが、エスポアールでした。20時49分40秒。

後の結果はホームページをご覧ください。あの江ノ島付近から何がどうなってこんなに開いたのかは、各艇からの報告に待つしかありませんが、最後のドナルドがフィニッシュしたのは午前6時17分40秒でした。全艇無事でほんとに良かった。

気仙沼

日が高くなって、気仙沼港に行ってみると、参加艇が三々五々休んだり、セイルを干したりして皆和やかな表情が印象的でした。会場のホテル望洋では、理事長挨拶と畑中先生への黙祷、気仙沼市長の挨拶（代読は大和田部長氏）とMORC 名誉会員菅原雅様（元市長さんです）の挨拶、小野寺五典議員の祝電が披露されました。

数字が示すように、気仙沼の皆さんのご理解と温かい配慮無くしては41回も続く訳が無いのです。レース委員の個人的見解ですが、来年は朝6時スタートして、常識的な時間にフィニッシュできるチャンスを増やして、寿司屋や、ラーメン屋、など気仙沼市にお金を落とすようにしないといかんかなと思います。

エスポアールは自分のクルーだけでの完全優勝で、見事というほかありません。参加各艇はそれぞれ個性的で、見物できた私は見応えありました。来年度はレース観戦ツアーを仕立ててファンを増やそうと思っております。

岩井崎にある石碑に、次のような句が刻まれておりました。

碧海（あおうみ）の 空とゆきかう波の果て 我が造りし船は行きけむ

2008.08.17 レース委員 赤石